

学部だより

『子どもの声を社会へ——子どもオンブズの挑戦』

——桜井智恵子先生の著書を紹介します！——

編集委員 大槻 美智子



桜井先生（右）と筆者

2012年2月、本学部教授 桜井智恵子先生の著書『子どもの声を社会へ—子どもオンブズの挑戦』が岩波新書から上梓されました。サブタイトルにある「子どもオンブズ」とは、先生が6年間携わった兵庫県川西市の「子ども人権オンブズパーソン」のことです。先生は、イタリアで開催された国際会議「子どもオンブズ8サミット」で「川西モデル」の実践報告をなさいました。『教育福祉研究』35号の「学部だより」にもその時のことを書いてくださっています。

今回は、『教育研究』編集委員である大槻が、本書を読み感じたこと、あるいは先生から伺ったお話などを通して、『子どもの声を社会へ—子どもオンブズの挑戦』を学会員のみなさまに紹介したいと思います。

この本は、まずとても読みやすいです。先生の語り口がほとんどそのまま文章になっている気がします。学生のみなさんにとっては、先生の講義を聞いているような感じなのではないでしょうか。私にとっても、「社会は若い人に失礼!」「私は絶句して『もうがんばらなくてもいい』とつぶやいた」「事態をもう少し『マシ』にする」「関係が少しゆるむとあら不思議、事態は思いのほか早く好転していく場合はとても多いのだ」「(子どもは)ポチポチと、ときにはメキメキと力を取り戻す」などの文章に出会うと、“ああ、サクライ節だなあ”と、先生の声や表情まで浮かんで来て思わず頬をゆるめてしまいます。この味わい方は、先生を身近に知る私たちだけの特権ではないでしょうか。また、本書にはたまに桜井ゼミの話が出てきます。私たちの大学のことや学生のことや話題になっているのは、読んでいて楽しいもので

す。

さて、本の内容についてお話ししましょう。

私は、この本の役割は二つあると思います。一つは、世界的にも注目される川西市子どもオンブズの活動を日本社会に紹介するということ、もうひとつは、この活動の中心にある思想・理念を人々に知らせ広めることです。その意味で、先生の語り口はとても読みやすく、入門書として最適なものです。

では、川西市子どもオンブズの中心にある思想・理念とは何でしょうか。それは、子どもに問題がおこった時、当事者である子どもだけを見て、子どもの能力や人格の問題にしてしまうのではなく、子どもの背後にあるもの——つまり、子どもを取り巻く人や社会との関係——に目を向け、それをこそ変えていかなければならないという理念です。そのことは、「子どもの問題は個人の問題ではない」「(子どもの問題を) 周囲の人間関係の問題としてとらえる」「(教育の問題を) 『教育で乗り越えない』」「教育の問題は社会構造の問題だ」という言葉によく現れています。さらに、子どもの小さな声は、私たちの社会のひずみに気づかせてくれる大切な声だ、だからこそ、「子どもの声を社会へ」届ける必要があると、先生は言います。

以上の考え方から、オンブズパーソンの役割が、子どもの声に耳を傾け、人と人との緊張を解き「ゆるやかな」関係を修復させ、時には社会制度に働きかけ調整していくことであることがよく理解できます。

「子どもだけを見ない、子どもの背後にこそ目を向ける」という川西市子どもオンブズのこのまなざしは、一部の研究者の間ではすでに常識となっているのかもしれませんが。私もかつて、河合隼雄『子どもと悪』（岩波書店）でこのような考え方に触れ、目を開かれた思いを持ったことがあります。しかし、一般的にこの考え方はあまり知られていません。マスコミは相変わらず“子どもか、教師か、学校か、家庭か”のどれかを悪者扱いにして済ませていますし、私たちもなんとなくその見方に洗脳されています。

ところが、川西市ではこの新しい思想が「子どもオンブズ」という行政機関において機能しているのです。そのことに驚き、また日本の未来に希望さえ感じました。そこで私は期待を込めて「この考え方は、新しい潮流になると思いますか」と先生に聞いてみました。それに対して、「いいえ」という答えが言下に返ってきて、私はまた驚きました。子どもオンブズとして多くの問題を解決してきた実践者である先生にして（いや実践者であるからこそでしょうか）、今の日本社会への絶望はそれほどまでに深いのです。

著者の悲観的な言葉にもかかわらず、この本が多くの人に読まれ、本書の思想のよき理解者がたくさん生まれることを願います。政治家や官僚が「教育」の現場をこねくりまわしても何もよくはなりません。変えるべきなのは「大人の社会」そのものであり、取り戻すべきなのは「人と人との関係」であるというこの理念を、私たち一人一人が共有できる社会になればどんなにかすばらしいことでしょう。